

二世帯同居における家事協力・集約と居場所

親子ネットワーク居住の実態調査(2)

二世帯 家事協力 家族形態 居場所 ネットワーク居住 共働き

- 正会員 ○任 智顯 *1
- 同 添田 昌志 *1
- 同 松本 吉彦 *2
- 同 入澤 敦子 *2

1. 調査の目的

二世帯同居では親世帯の家事育児協力が行われていることは知られているが、具体的な協力内容や家族構成による違いについてはあまり明らかにされていない。本研究は、親子世帯間における家事育児協力の実態および、個人の占有スペースに対するニーズを把握し、二世帯住宅に求められる空間の要件を示すことを目的とする。

2. 調査の対象

ハウスメーカーA社の建設した注文住宅の居住者を対象にメールを送付し、親子同居中の子世帯妻にアンケートサイト画面で回答を依頼した。キッチンの専用共用により分離同居と融合同居に分け比較する(表1)。

表1: 調査概要

調査3. 三世帯同居における育児協力と家族の居場所							
調査時期: 2010年2月							
調査対象: 子世帯で下記条件に適合する方 (回答者: 子世帯の妻)							
1) 親世帯と同居(近居は含まず) 2) 中学生以下の子がいる							
調査方法: 戸建て注文住宅居住者に対するWebアンケート							
調査エリア: 関東~東海~関西~山陽~北九州の各都府県							
分離状況	息子・娘同居	子世帯妻の就業形態	親世帯家族				
			両親同居	母親同居	父親同居		
分離同居 (キッチン各世帯専用)	264	息子夫婦同居	専業主婦	133	90	33	10
独立二世帯 (111) / 共用二世帯 (153)			共働き	126	70	42	14
融合同居 (キッチン両世帯共用)	151	娘夫婦同居	専業主婦	85	53	24	8
融合二世帯 (40) / 一体世帯 (111)			共働き	71	46	24	1

3. 家族構成による生活の分離・融合志向の差

息子夫婦同居・娘夫婦同居、あるいは両親・片親、専業主婦・共働きといった家族の構成や状況により、同居生活の独立・融合志向が影響されている(図1)。息子夫婦同居は娘夫婦同居に比べて別居志向・独立同居志向が高く、母親同居で共働きの場合のみ融合同居志向が高くなる。娘夫婦・両親同居の場合には、専業主婦・共働きといった就業形態による影響を大きく受け、共働きの場合には親世帯のサポートを期待して、融合同居志向が高まっているといえる。一方、娘夫婦・母親同居の場合には就業形態によらず融合同居志向が高くなっている。

孫が夕食を誰と取っているかを見ると(図2)、専業主婦では「妻+子」の組み合わせが最も多いのに対し、共働きではそれが半減し、代わって親世帯と孫で食事をする「親世帯+孫」の組み合わせが多くなっている。

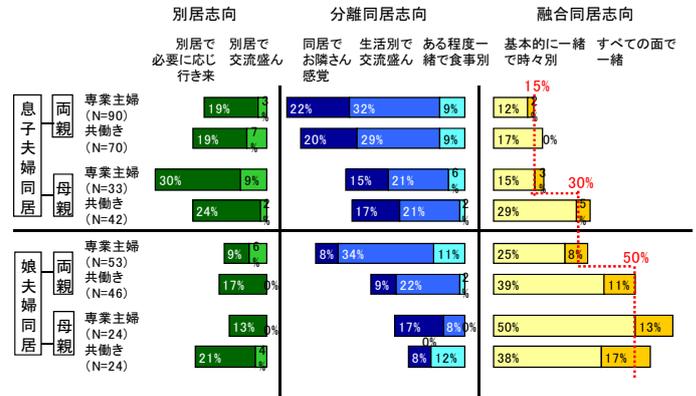


図1: 家族構成別の生活の分離・融合志向

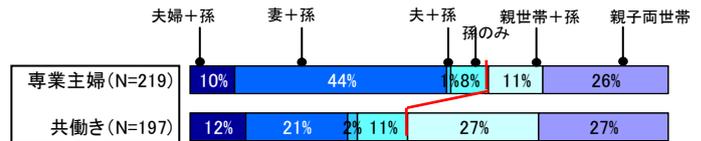


図2: 孫夕食時に同席する家族の組合せ

4. 娘夫婦同居・共働きでの夕食準備の集約化

夕食の準備を担当する人も家族の構成や状況によって異なる(図3)。息子夫婦同居(父親)で専業主婦の場合母の関与は少ないが、息子夫婦より娘夫婦、専業主婦より共働きで母の関与が高まる傾向にある。特に娘夫婦・両親・共働きの家族では「大体+毎日」母が作る率が5割を超えており、親世帯への家事集約が顕著である。

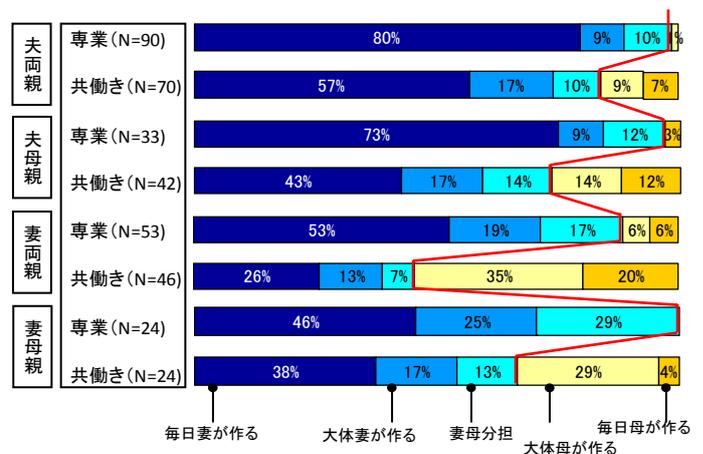


図3: 夕食準備の分担

5. 子世帯夫単独の食事スペース

子世帯の夫は帰宅時間が遅いため、夕食時間が他の家族とずれることが多い。これは、息子夫婦、娘夫婦にかかわらず共通に見られる傾向である（図4）。一方で、夕食時間がずれた夫が夕食をとる場所には違いがあり、息子夫婦では親世帯専用スペースや共用スペースで取る割合が高いものの、娘夫婦では妻の夕食場所が親世帯と一緒にの場合でも夫は子世帯専用スペースで取る割合が2/3となっている。夫が気兼ねして子世帯専用スペースに移動する状況を示していると考えられ、このような場合は共用の食事空間の他に、補助的な食事空間が必要になるケースを考慮する必要がある。

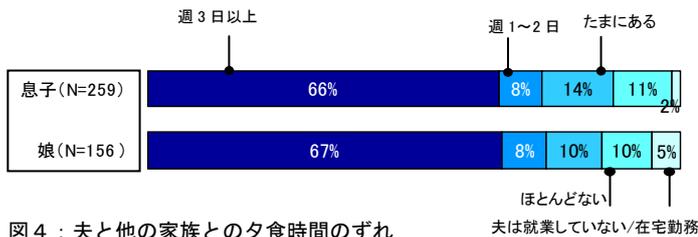


図4：夫と他の家族との夕食時間のずれ

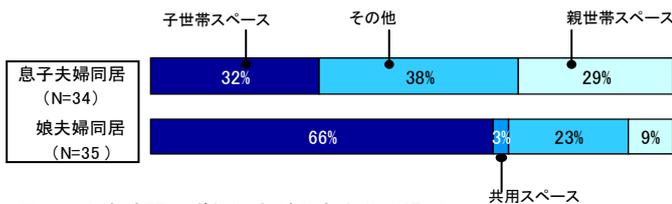


図5：夕食時間のずれた夫が夕食をとる場所
(分析対象：他家族の夕食が一緒の場所で、子世帯専用のスペースがあるもの)

6. 家族の居場所

独立同居・融合同居の家族を対象に、家族それぞれの居場所があるかどうかを尋ねた（図6・7）。ここで言う居場所とは、各自が思い思いに過ごすことができる場所のこととしている。居場所に対するニーズ（「現在居場所があり活用している人」と「居場所はないが必要と感じている人」を足した割合）は子世帯・親世帯とも6割を超えており高く、特に融合同居においてはどの家族についても約8割となっている。

居場所での行為では、親世帯父母共通で「TVを見る」また母については、「趣味をする」の割合が高く、子世帯では、「PCを使う」、「仕事をする」「書き物をする」といった行為が多く行われている。

二世帯同居、特に融合同居においては、生活が融合するが故に、家族それぞれの個人空間に対するニーズが高まるのが改めて確認された。居場所においては、各自が求める多様な行為を可能にする空間的しつらえ（趣味のものを収納する家具や仕事・作業をする棚など）が必要なが示唆されている。

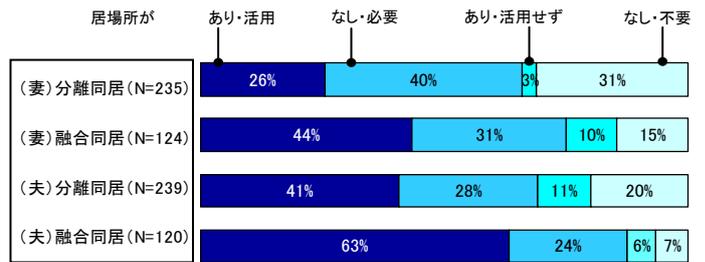


図6：子世帯夫婦の居場所

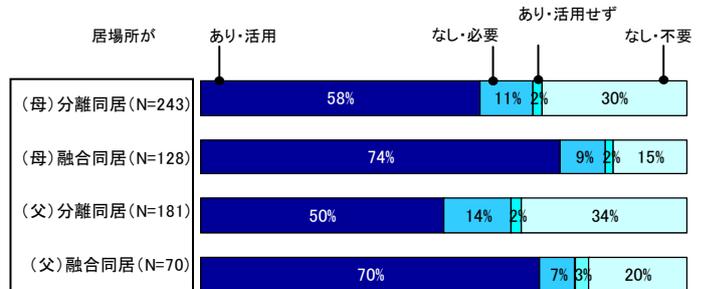


図7：親世帯夫婦の居場所

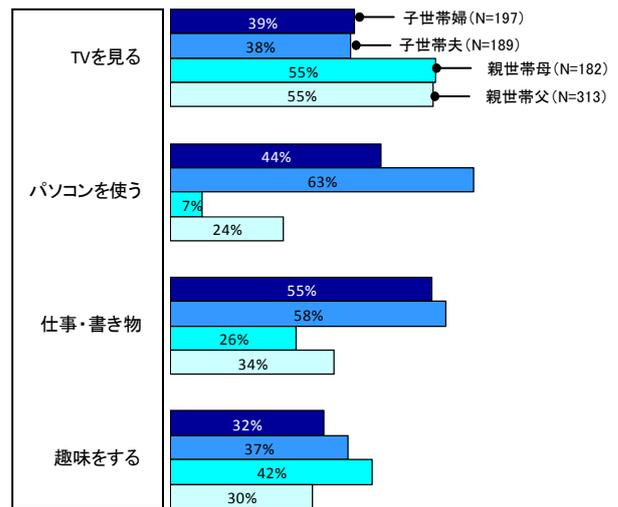


図8：居場所での行為

7. まとめ

- 1) 生活の分離・融合志向においては息子夫婦同居では分離志向が強く、娘夫婦・母親同居・共働きといった要素が加わるにつれ融合志向が強まる。
- 2) 融合志向が強い娘夫婦同居での共働き世帯では、夕食準備の集約が半数の世帯で見られた。
- 3) 夕食が一緒に、子世帯夫のみ夕食がずれる場合、娘夫婦同居を中心に子世帯専用空間で夕食となる傾向が見られた。
- 4) 分離同居と比較し融合同居では居場所がある割合が高く、生活の一部が融合する場合ほど家族の居場所の重要性が増すことを示唆する結果となった。

* 1 LLP 人間環境デザイン研究所

* 2 旭化成ホームズ くらしノベーション研究所

* 1 LLP Human Environment Design Laboratory

* 2 Asahikasei Homes Co. Research Institute of Lifestyle Innovation